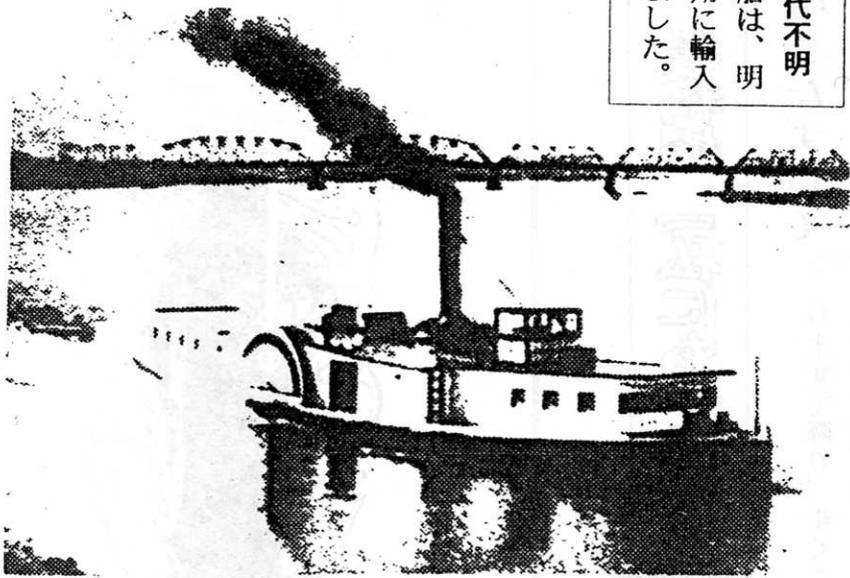


### 郷土製津なつかし写真館

※年代不明  
蒸気船は、明治初期に輸入されました。



# 郷土製津

## いにしえ通信

第13号

平成十一年五月一日

発行

摂津市三島一丁目一番一号

摂津市教育委員会

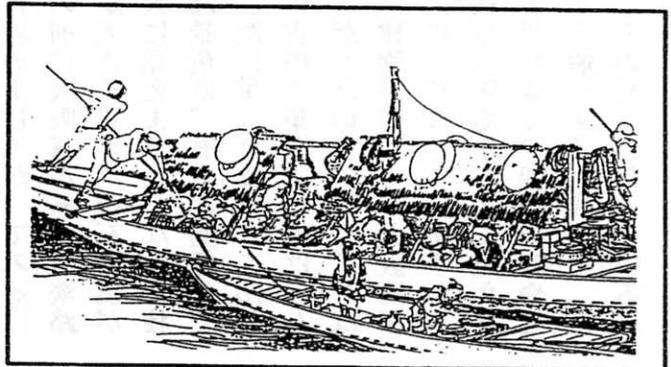
生涯学習部 生涯学習課

## 三十石船

三十石船は、朝・晩の二回、伏見と大坂間を定期的に双方から上下し、上りは一日または一夜、下りは半日または半夜を要した。下りは棹を使い上りは引綱で船を引くが順風の際には帆も用いた。船頭四人、乗客二十八人。

安藤広重『京都名所』より

## 淀川の外輪船



「母なる川」淀川は昔から民をうるおし、実りをもたらせてきました。同時に京・大坂を結ぶ重要な交通路として大切な役割をはたしてきました。その歴史は古く、古代の文献には舟便があつたとしるされています。



京に都が移されると交通路としての役割は、さらに増大しました。

江戸時代になると東海道・中仙道等の街道整備が進められると、旅人が増大し、それにともない淀川の水運も活発になりました。またその種類も多彩となりました。

# 金剛院木造不動明王立像



## 公開展示

と き  
5月14日から5月20日まで  
午前9時から午後4時まで  
ところ  
摂津市千里丘三丁目 金剛院

○第七号でお伝えしました不動明王立像の修復が無事終了し、このたび公開展示されることになりました。  
○本像は、大阪府有形文化財に指定されています。  
○護摩堂の本尊、寄木造り、彩色の等身像で光背・台座を有します。平安時代の作と推定されます。

## 投稿欄 『私にも一言』

### 五色塚古墳をたずねて

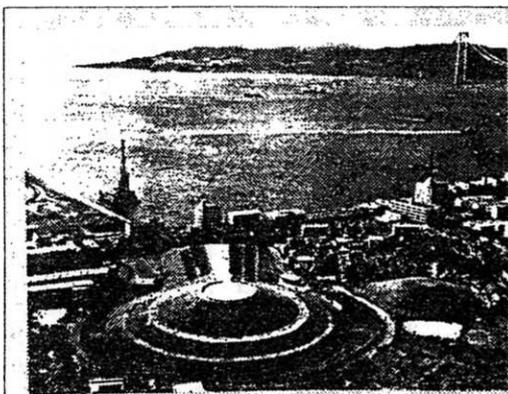
正雀在任 ㍻・㍻

小学生六年の孫の社会科の本を開いていたら、五色塚古墳の写真が写っていました。摂津市から日帰りで行けますので、急に行きたくなり家を飛び出しました。

正雀から阪急電車に乗り、三宮駅で山陽電車に乗り換え

垂水駅で降り、歩くこと約十五分で古墳につきました。古墳といえば草木が生い茂った小山を想像していましたが、本来の古墳とはこんなものだと思います。驚きと同時に啞然としました。長い年月をかけて鳥が草木の種を運び、それが育ち、よく見かける草木が生い茂った現在の古墳の姿になったのでしょうか。

古墳の上にながらみると、目の前に大阪湾があり、淡路島が大きく見え、明石大橋が雄大に見えました。なんと壮大な景色は、歴史に関係なく見ごたえがあります。こんな所に古墳を築造する人はどんな人だったのでしょうか。今は前に建物が建って、大阪湾が見えにくくなっていますが、古代は大阪湾からよく見えたことでしょうか。朝鮮半島や九州から船で来る古代人に「どんなものだ」と言っているようです。



← 空から見た五色塚古墳  
(正面が淡路島、右端が明石大橋)



味舌の水利・江戸時代

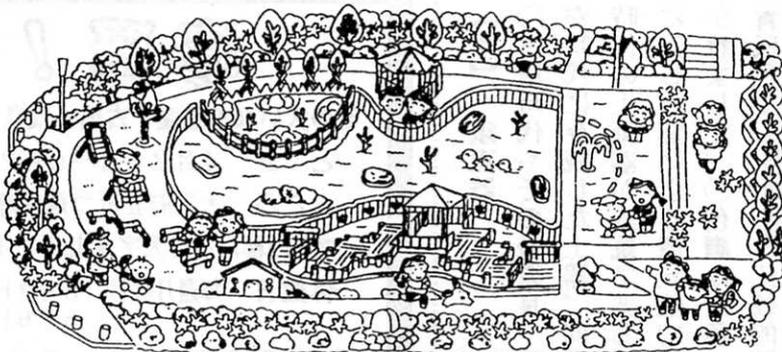
摂津市域は水に悩まされた所で、安威川をはさんで、南側は水が多すぎて悩み、北側は水がなくて悩んだ所でありました。味舌地域はしばしば用水の不足にも悩まされた水干兩難の地でした。ここでは用水は、安威川や番田川などの水を堰き揚げたり、山田川や正尺（雀）川の水を利用したりしていました。しかし、それだけでは不足するので、溜池を掘り池水による灌漑を行っていました。この南北の相違が時には利害の対立を生み出すことになっていました。とくに、その接点となる味舌下村などでは、しばしばその矛盾が顕在化することにもなりました。水の問題は村々にとって最も重大な問題でありました。

庄屋村は、中央に山田川があり、東側に境川、西側に正尺川があるが、用水源としては、もっぱら山田川を利用していました。毎年、川中に土砂溜めを二カ所作り、それでも用水が上りかねるときは、さらに戸関板で締め切つて揚水しました。その用水樋としては、東用水樋一カ所、瓦樋二カ所があり、さらに豊嶋樋と呼ばれる用悪水樋がありました。しかし、山田川の流水はきわめて乏しく、日照りが十日も続けば干上がつてしまひ、あとは井戸水を昼夜汲み上げるが、それもせいぜい七八日のことで、それ以上になると干損が生じました。そこで、古くから牛屋池という溜池（面積九反四畝歩、約九三二二平方メートル）から水を引いていました。しかし、その取水権は味舌下村が三分の一

二を占め、庄屋村は三分の一だけであつて、用水はなお不十分でありました。そのため、明和年間（一七六四年から一七七一年まで）には新しい用水溜池の造成を願ひ出て許されて平地を掘り立てて普請しました。この池が昭和の時代まで存在していた明和池（面積六反三畝歩）でした。これにかなりの干損が防げるようになり、しかし、その反面、これらの池の維持費や水の出し入れの人足賃など用水費がかさみ、高二〇〇石余小村である庄屋村の財政を圧迫することとなりました。このため年々、夫食米の支給を願ひ出て、認められているありさまでした。

味舌上村の灌漑用水施設として、正尺川・山田川・大池（現市場池）・小池からの用水樋一四カ所や堰三カ所がありました。しかし、少し日照りが続くと、川水も池水も絶えて、井手（堰）のしたたり水を汲むやら、深井戸の水を汲み上げるやら、庄屋村同様に用水の苦勞が多い村でした。

市場池オアシス広場 ↓ 現在の市場池



※夫食（ふじき） 江戸時代には一般に農民の食糧をさす語ですが、夫食貸といつて、凶作飢饉のさいには幕府・諸藩は飯米のない農民に米穀または金銭を貸し付けました。

公園みどり課作成パンフより

「摂津市史」より 担当（茗荷）

考古雑話

第 1 3 回

撰津市と水田の考古学

水田発掘のあゆみ

一八七七年、エドワード・

S・モースが大森貝塚を発掘して、わが国でも科学的な考古学による発掘調査のあゆみをはじめりました。しかしモースの報告では、われわれの祖先がどのような植物質の食料を利用していたかどうかは言及されませんでした。その後一九一七年にいたり九州大学にいた中山平次郎が、福岡県八女郡長峰村から出土した土器とともに多量な焼米が出土したと報告しています。

一九二五年には山内清男が宮城県多賀城市の榊形囲貝塚から採集された土器の底に稲糊の圧痕がついていることを発見し反響をよびました。このように現在では弥生時代の

特徴として稲作農耕が常識となつていますが、この時代には、弥生時代にはまだ稲作が始まっていなかったというのが一般的な認識でした。

その後弥生文化研究が軌道にのりはじめたのは、青銅器研究のためパリに留学していた森本六爾が帰国してからになります。森本は弥生時代の実相にせまる目的で東京考古学会を設立し在野の有志らとともに情熱的に活動していきます。また多数の著作をあらわし、後の弥生研究の基礎をつくりました。

また森本は、はやくから弥生集落の立地が、水田経営にふさわしい低地を選んでいると指摘しています。撰津市内でも淀川に近接する鳥飼西地区から弥生時代前期に属する壺が採集されています。現在

展示のお知らせ

渡来人登場

弥生文化を開いた人々

とき 4月17日~6月27日

ところ 大阪府立弥生文化博物館

和泉市池上町443

休館日 毎週月曜日 5月3日は開館  
5月6日は休館

☎0725-46-2162

修羅!

その大いなる遺産 古墳・飛鳥を運ぶ

とき 4月20日~6月20日

ところ 大阪府立近つ飛鳥博物館

南河内郡河南町大字東山299番地

休館日 毎週月曜日 5月3日は開館  
5月6日は休館

☎0721-93-8321

光蓮寺に保管されているこの土器は壺棺など特殊な用途が想定でき、稲作農耕を直接に示すものではありませんが、撰津市における淀川周辺の弥生人の生活を考えるうえで重要な資料といえます。

(次号へつづく)



榊形囲貝塚出土の糊痕土器底  
水田の考古学・工業善通より

【す】 須恵器

○古墳時代やその後奈良・平安時代に存続した土器。同じ時代の上師器が素焼であるのに対し穴窯による還元焼で焼かれました。○色調は灰色・青灰色で比較的堅土器です。○五世紀ごろ大陸の工人にへもたらされた。須恵により従来の土器では困難であった貯蔵の容器として広く使用されました。撰津市でも千里丘地域を中心に比較的多く出土します。担当 (伊部)

